

三条西家本『狭衣物語』における登場人物描写の一考察

——天稚御子と源氏の宮から——

勝 亦 志 織

はじめに

『狭衣物語』は諸本間で多くの異同があり、写本数も膨大である。その中で三条西家旧蔵『狭衣物語』（現、学習院大学文学部日本語日本文学科蔵）は巻一のみのも現存ではあるが、いわゆる第三系統を代表する写本であるとされる。⁽¹⁾当該写本を含めていわゆる第三系統における登場人物の語り方は他本とは異なる点を持つ。

本稿では天稚御子と源氏の宮の二人の登場人物について、主人公狭衣と関わる場面において、どのように語られているのかについて考察したい。天稚御子については主人公狭衣と

の関わり方を、源氏の宮の描写については他の女君の描写との関わり方について他系統の諸本との比較から、当該写本及び同系統の写本に独自の表現について考察したい。⁽²⁾

一、三条西家本における天稚御子の描写

まず、三条西家本における天稚御子降臨場面について検討したい。天稚御子降臨場面は『狭衣物語』中、重要な場面であり、そのためか、諸本間での異同が激しい箇所でもある。以下、三条西家本における天稚御子降臨場面を引用する。⁽³⁾

宵過ぐるままに、雲のはたてまで響き昇る心地するに、

稲妻のたびたびして雲のたたずまひ例ならぬを、雷の鳴るべきにやと見るに空いたう晴れて、星いと明かくなりぬ。星の光ども月に異ならず。この御笛の音の同じ声を、さまざまの琴、笛弾き合はせて、言ひ知らずおもしろき樂の声近く聞こゆるに「いかなることぞ」と帝、東宮をはじめ、あさみ合はせたまふ。中將の君ももの心細げにて「天人もいかでかめでざらん」とあまりあさましきに、誰々もあざれたるやうなり。樂の声近くなりて、紫の雲に乗りて遊ぶもいと近く見ゆるを見騒ぎたるに、中將の君の見やりたまひて、もの心細うなりて、いたく惜しみたまふ音をやや残す限なく吹き澄まして、

稲妻の光にゆかん天の原はるかに渡せ雲のかけはしと音の限り吹き立てたまへるに、え忍びあへたまはぬにや、紫の雲たなびきて、鬚づら結び、言ひ知らずをかしげなる童の装束うるはしくしたるが、ふとおりくだるままに、いとゆふ何ぞと見ゆるいと薄き衣を中將にうち着せたまひて、袖を取りて引きたまふに、我もいみじうもの心細うて立ち止まるべき心地もせず、めでたくいみじき御さまの引き離れにくくて、笛を吹く吹く誘はれぬ

べき気色に、帝、御心騒がせたまひて「世の人の言種に、「この世のものにはあらず、天人の天降れるにこそ」とのみ言ひ合ひたるは、げにこそありけれ。大殿の、かやう事をも絶え絶えさせず、「月日の光にもあてじ」とあやふくいまいましき物に思ひたるを、この人を、かくて目にみすみす雲の果てに迷はしては、我が御身もこの世に過ごさせたまふべき御心地もせさせたまはねば、いといみじき御気色にて引きとどめさせたまふを、かなしう見たてまつらせたまふに、帝の御前にさし寄りて参らせたまふ。

九重の雲の上まで昇りなば天つ空をや形見とは見んまいて大殿、母宮などの聞きたまはんことも思し出づるに「いとはしう思さるこの世なれども、振り捨て難きに」と、かかる御迎へのかたじけなきにひとへに思ひ絶え、帝の御袖を控へて惜しみかなしみ、親たちのかつ見るをだに、うしろめたく思ひたるを、行方なく聞きたまひて、むなしき空を形見とながめたまはんかなしさに、言ひ知らずかなしうおもしろつ作りて、笛を持ちながら、涙ぐみたまへる御顔かたちは、天人並びたまへる。

天稚御子 涙を流して、何事もこの世にすぐれたまへる

によりて誘ひつれど、かく十善の君の泣く泣く惜しみなしみたまへば、ひたすらに、今宵率て昇らずなりぬるよしを、ことわりにめでたくなしき笛の心ばへ、口惜しさを作りかはして、雲の興寄せて乗りたまひぬる名残のほひばかりとまりて、空の気色も変はりぬるを、あさましなども、世の常のことをこそ言へ。「めづらかなり」と見る際の人、夢の心地したまひけり。(六〇) 六二頁)

まず、傍線等で示した通り、天稚御子の登場は「紫の雲に乗りて遊ぶ」様子が遠景で捉えられ、それが狭衣の目の前まで近づいてきたところで、「紫の雲たなびきて、鬢づら結び、言ひ知らずをかしげなる童の装束するはしくしたる」と表現される。そして、具体的な行動を示した後、漢詩を詠むところで初めて、「天稚御子」とその存在が明らかにされるのである。そもそも天稚御子とは何者かという問題がある。他作品にも登場するが、『全註釈』の語釈で「一般に天上界に住む幼少の天人をいう。」と端的に示されているよう

に、三条西家本の本文でも にあるように鬢すらを結つた童の天人である。この「天稚御子」は、と追っていくと、登場時には「天稚御子」とは明示されないことに気付く。この点が他系統の本文では描写が異なっている。この場面について、『全註釈』において、深川本（第一系統）、為家本（第二系統）、三条西家本（第三系統）、古活字本（第四系統）の四本が代表されて本文比較されている（一七一―一七五頁）。それをもとに、「天稚御子」がどのように登場しているかを確認すると以下のようになる。

深川本：楽の声いとど近くなりて、紫の雲たなびくと見るに、天稚御子、角髪結びて、言ひ知らずをかしげに、かうばしき童にて

為家本：楽の声近く聞こえて、天稚御子、言ひ知らずきよげにて

古活字本：楽の声々いとど近うなりて、「紫の雲たなびきわたる」と見ゆるに、鬢頬結びて、言ひ知らずをかしげなる童の、装束するはしくしたるかうばしきもの

深川本、為家本は登場の最初から天稚御子であることが判明しており、以下、天稚御子が主語として使用されている。

一方、三条西家本と近い本文を持つ古活字本であるが、この本文は三条西家本ではに当たる文章中のものであり、この後のに該当する本文はほぼ三条西家本と同じである。つまり、他の諸本では遠景の天稚御子は登場せず、古活字本（第四系統）と三条西家本（第三系統）が天から下ってきた童子姿の天人のことを後から「天稚御子」と称していることがわかる。

ある意味で第一系統、第二系統の本文では「天稚御子」という存在は自明のものであつて、狭衣を天に誘う役割の天人が明確化されていたといえよう。一方、三条西家本をはじめとする第三系統や第四系統の諸本では、登場時には童子姿の天人だとのみ認識していたのが、後から「天稚御子」であると理解したということになる。その違いは何に拠るのか。そこには、続く狭衣と漢詩を詠み交わす場面が関係していよう。

三条西家本は漢詩を作り交わす場面にいたって、「天稚御子」と明らかにされる。狭衣と一緒に天上に行けない理由を漢詩に詠み、それに呼応して天稚御子が狭衣の素晴らしさに

よって誘いに来たけれど天上に連れて行けないこと、狭衣の「笛」の素晴らしさを漢詩に詠む。この漢詩を詠み交わす場面も諸本によって差がある。深川本では漢詩を先に詠むのは天稚御子であり、狭衣がそれに呼応する。為家本では狭衣が先に漢詩を詠み、天稚御子は漢詩で答えた後にお互いの「笛」を交換する。古活字本は狭衣が漢詩を詠み、それに天稚御子が漢詩で答えているが、狭衣を評価するのは「笛」ではなく「文」（漢詩）である。「笛」と「文」については、「え」と「み」の誤写も想定されようが、少なくとも三条西家本において天稚御子が称賛したものは「笛」であつた。

天稚御子は『うつほ物語』俊蔭巻にも登場し、音楽伝承に関わつた天人であるとされ、三条西家本の本文でも音楽「笛」を愛でる天人であることから「天稚御子」という天人の素性が示されたとも理解出来るのではないか。ただし、古活字本の本文であつても、漢詩を詠んだ際に天稚御子であると判明するのは、この漢詩の作者としての天人の素性が要請されたからにほかならない。漢詩を作り誦す際に自ら「天稚御子」の名のりがなされ、漢詩作者として「天稚御子」という天人が認定されたと考えられよう。後文でこの漢詩が博士達に

よって書きとめられたことを考えると、作者が明記された漢詩文の有り様を受けていると考えられるかもしれない。

以上、系統ごとに異なる天稚御子の描かれ方を比較してきた。三条西家本が遠景から近景、そして正確な素性が明かされるという流れを持つことがここから浮かび上がってきたのではないだろうか。⁵⁾

二、三条西家本における源氏の宮の描写

——他本との比較から——

一では、巻一でもドラマティックな場面である天稚御子降臨の場面について取り上げた。二では、地上に残ることを決めた狭衣が思慕し続ける源氏の宮を見つめる場面を取り上げたい。まずは、三条西家本での該当箇所を上げる。

暑さのわりなき頃は、水恋鳥にもおとらず、心ひとつには焦がれまざりたまへど、知る人もなし。昼つ方、源氏の宮に参りたまへれば、白き羅の単衣を着たまひて、

色は御単衣よりも白く透きたまへるに、額髪のゆらゆ

らこぼれかかりて、裾はこちたくたたなはれ、削ぎたる裾の削ぎ末、いくらを限りと生ひゆかん。所狭げなるものから、なまめかしう見えたまふ。隠れなき御単衣に、御髪のひまひまより見えたる御腰つき、腕などのうつくしさの、人にも似たまはぬは、「あまり思ひしみにたる我が目からにや」とまぼられて、胸はつぶつぶと鳴り騒げど、よくしのび隠して、つれなくぞもて隠したまへる。

「いと暑きほど、いかなる御文御覧するぞ」

と聞こえたまへば、

「齋院より絵ども賜はせたる」

とて、隈もなき日の気色に、はなばなとにほひ満ちたまへる御顔つき、まばゆげに思ひて、少しうち赤みて、この文にまぎらはしたまへる用意、気色、まみなど言ひ尽くすべくもあらず、めでたく見えたまふに、涙さへ落ちぬべきまぎらはしに、この絵どもを見たまへば、在五中將の日記をかきて、目とどまる所もあるに、
「これはいかが御覧する」
とて、さし寄せたまへるまに、

「よしさらば昔の跡をたづね見よ我のみ惑ふ恋の道かは」
 言ひもやらす、涙のほろほろとこぼるるをだに、「あや
 し」と思さるるに、御手をとらへて、袖のしがらみせ
 きもやらぬ気色なるを、宮いとあさましうおそろしうな
 りたまひて、やがてとらへたる腕にうつぶし伏したま
 ひぬる気色の、言ひ知らぬものなどにとらへられたるや
 うに思したるに、いとど心騒ぎして、思ひつる心のうち
 を片端だにうち出つべくもなく、涙におぼれたまへり。

(八二丁八三頁)

この場面では、狭衣の視線によつて捉えられた源氏の宮が
 描かれる。の傍線部で描かれる狭衣の視線の動く様子を示
 すと以下ようになる。

- 1、白き羅の単衣
- 2、単衣から透けて見える肌色の白さ
- 3、額髪の様子から髪全体、裾の削ぎ末
- 4、長い髪の間から見える腰つきと腕

1から4まで列挙してみると、狭衣は源氏の宮の身体を見つ
 めていることがわかる。ここで注意したいのは「腰つき」と

「腕」への注目である。場面は六月であり夏の暑さに白い羅
 の単衣を着た源氏の宮。狭衣は源氏の宮の身体を見つめた先
 に髪と髪の間から見える「腰つき」と「腕」に焦点を当てる。
 この二つの語を持つ本文は第三系統と第四系統のみであり、
 例えば深川本にはこの表現はなく「隠れなき御単衣に透き給
 へるつつくしさ」と全体を指す表現が取られ、為家本では
 「腰つき」はなく、「隠れなき御単衣に透かせ給へる腕つき」
 のみである。

「腰つき」の用例を見ると、『源氏物語』に次のような
 表現がある。⁽⁶⁾

紫苑色のをりにあひたる、羅の裳あざやかにひき結ひた
 る腰つき、たをやかになまめきたり。(夕顔一四七)
 隅の間ばかりにぞ、いと寒げなる女ばら、白き衣のいひ
 しらず煤けたるに、きたなげなる褶ひき結ひつけたる腰
 つきかたくなしげなり(末摘花二九〇)

一つ目の用例は、六条御息所に仕える女房、中将の君が羅の
 裳を結んだ様子のなまめかしさを、二つ目の用例は末摘花に

仕える下級の女房が褶を結んだ様子のみつともなさを「腰つき」として表現している。真逆な表現ではあるものの、対象がいずれも女房階級であることは留意されよう。六条御息所、あるいは未摘花といった女主人の「腰つき」は『源氏物語』中には描かれず、そもそも女主人（姫君）の「腰つき」に視線を止める状態は起こり得てはならないのである。ここでは、狭衣が兄妹のように育った間柄ゆえの源氏の宮であるからこそ、腰つきまでも見てしまう狭衣が、第三系統と第四系統には描かれていることになる。

もう一点、この狭衣の視点があぶり出しているのは源氏の宮の「腰つき」の様子が長い髪越しのものであることだ。黒髪の間々から見える腰つき、そこには表記されてはいないものの源氏の宮が身につけている袴の緋色が想起されよう。羅の単衣に肌の白、黒髪の黒、袴の緋色と源氏の宮を彩る色彩に狭衣の視線が奪われているともいえるだろう。この色彩という点で問題になるのは「赤」を示す内容の差異である。

校本⁽⁷⁾によれば、前掲引用の傍線部にある「白き羅の単衣を着たまひて」の後に、「赤き紙なる文を見たまふ」という本文を持つ諸本が多数ある。持たないものは三条西家本と蓮

空本・大島本・四季本・文禄本・宝玲本（四季本、文禄本、宝玲本の三本は三条西家本と同系統の本文とされる）のみである。この「赤き紙なる文」は後掲の「在五中将の日記」の絵を描いたものであるが、色彩としての赤が明確に示されている。⁽⁸⁾

また、深川本をはじめとする第一系統諸本のみではあるが、前掲引用文の のところに、『源氏物語』を引用した次のような一文がある。（引用は『全註釈』による）

「源氏の女一の宮も、いとかくばかりは、えこそおはせざりければにや、薫大将の、さしも心とどめざりけん」とぞおぼさる。

ここでの源氏の女一の宮は、『源氏物語』で薫が思慕した冷泉院の女一の宮と今上帝の女一の宮の双方が想起されるが、源氏の宮の衣装を考えると次に挙げる『源氏物語』の本文と重なり今上帝の女一の宮が該当しよう。

白き薄物の御衣着たまへる人の、手に氷を持ちながら、

かくあらそふをすこし笑みたまへる御顔、言はむ方なくうつくしげなり。いと暑さの堪へがたき日なれば、こちたき御髪の、苦しう思さるるにやあらむ、すこしこなたになびかして引かれたるほど、たとへんものなし。(中略 翌日、薫は自分の妻である女一の宮に垣間見た女一の宮と同じ衣装を着させる)「あなたに参りて、大忒に、薄物の単衣の御衣縫ひてまあれと言へ」とのたまふ。御前なる人は、この御容貌のいみじき盛りにおはしますを、もてはやしきこえたまふとをかしう思へり。例の、念誦したまふ。わが御方におはしまして、昼つ方渡りたまへれば、のたまひつる御衣御几帳にうち懸けたり。「何ぞ、こは奉らぬ。人多く見る時なむ、透きたるもの着るは、ばうぞくにおぼゆる。ただ今はあへはべりなん」とて、手づから着せたてまつりたまふ。御袴も昨日の同じく紅なり。御髪の多さ、裾などは劣りたまはねど、なほさまざまなるにや、似るべくもあらず。(蜻蛉二四八―二五二)

白き薄物の単衣を着た今上帝の女一の宮、女一の宮の描写に

はなかつたものの、二つ目の傍線部に明らかなように、女一の宮は紅の袴を身につけていた。「狭衣物語」本文において「源氏の女一の宮」と表現されたとき、この「源氏物語」蜻蛉巻の場面を想起する享受者層は決して少なくなかったと思われる。深川本等もここではつきりと「紅」の袴を引用しているわけではない。しかし、少なくとも夏という季節、表現の重なる衣装、女一の宮と薫という人物名から蜻蛉巻の垣間見場面を想起し、それを「狭衣物語」の当該場面に重ねて理解し、もう一つの「赤」を見ることは可能であろう。

一方、そうした本文を持たない三条西家本を含む他の諸本においても、女性の身につける緋色の袴は簡単に想起し得よう。そうした結果、「源氏の女一の宮も」という本文は不要と見なされたか、あるいは「白き羅の単衣」とあることだけで、「源氏物語」を読み込んだ読者は蜻蛉巻を想起し得ることが可能であり、追加されたのかもしれない¹⁹⁾。

さて、「腰つき」からイメージされる「赤」に続く本文は「腕」であった。再び白い腕に視点が当てられているのであるが、これは続く本文との関わりから考えられる。為家本等の第二系統でも「腕」が組み込まれているのは、前掲引用本

文の傍線部「御手をとらへて」「やがてとらへたる腕に」とあることと連動しよう。自分の視線を奪った白い腕（あるいはその先にある手）を狭衣は捕らえる。そして、狭衣は源氏の宮の腕を捕らえながら自分の思いを告白していくことになるのである。

以上、第三系統と第四系統の本文がもつ「御腰つき、腕など」に注目して考察を進めてきた。「腰つき」からは具体的に表現されていない赤い色が示されており、単衣や肌の白さ、黒髪と相まって、源氏の宮を彩る色彩となっていた。そしてもう一点、これまで高貴な女性に対しては使用されることのなかった「腰つき」が源氏の宮に使われていることで、狭衣の視線の持つ隠微な欲望が透かし見えてきた。その狭衣の情動は「腕」に集約され、彼女の腕を捕らえることになるのである。

三、三條西家本における源氏の宮の描写二

——他の女君との比較から——

さて、本節では、三條西家本における女性たちの描写を比

較すること、源氏の宮の描かれ方について考察していきたい。まず、狭衣が見た女性たちのうち、飛鳥井女君の様子を引用する。

飛鳥井女君の描写

火さへ明かくて、かたはらいたうてわりなきにとみにも動かれぬを、引き起こしたまへれば、衣などいと鮮やかにもなきに、髪はつやつやとかかりて、「いとわりなくはづかし」と思ひたる気色など、なべてのさまにはあらず。ただいとらうたげに、をかしき人様にてありける。

（二二〇頁）

この場面は、狭衣が飛鳥井女君の具体的な様子を初めて見たところである。傍線部にあるように、髪と飛鳥井女君がどのような様子でいるのかの描写のみである。出会ったのが夜ではあるが火の光で見る飛鳥井女君は寺に参籠していた事でもあり、あまり華美な衣装は身につけていなかったようである。しかしながら、飛鳥井女君についてはこの後も具体的な描写はあまりない。

次に、洞院の上が引き取った今姫君を垣間見たときに様

子を引用する。

今姫君の描写

のどのどと見入れたまへば、香染に鈍色の単衣、紅の袴の黄ばみたるを着て昼寝したる、人々の騒ぐにおどろきて、奥なく起きあがりたるに、いとよう見合はせて、あさましきにや、とみにうち背きなんともせず、あきれたる氣配、顔はいとをかしげなめり。「心地なのさまや」とは見えながら、「女房の氣配よりは、こよなく見つばかりけり」と思ひ増したまひつつ、「かの兄のかこちけるゆゑにや、少將にぞいとよう似たりける。殿の御子とは言ふべくもあらざりけり」と見るに、ただならずや思ひたまふらん。「やつものごと、あやしの心ばへや」と我ながら心づきなし。母代からうじて几帳起こし立つれば、立ち退きたまひぬ。(二五七―二五八頁)

今姫君の場合、衣装は具体的に描かれている。「香染に鈍色の単衣」からは実母の喪中であることが示されているのである。洞院の上のもとに引き取られ、落ち着かない女房たちを囲まれて日々を過ごしている今姫君がまだ喪中であつたこ

とは、彼女と周囲の雰囲気との違和を浮かび上がらせているといえる。また、一方で具体的な衣装描写がありながら、源氏の宮のような身体全体への意識は全くない。むしろ衣装に埋もれて本人の存在が薄いかのようである。

また、狭衣の視点は、今姫君が堀川の大殿の血筋ではないことに向いている。波線部にあるように、中務の宮の少將に似ており堀川の大殿の子供とはいえないと見る狭衣の視線は不躰なものでもある。今姫君の周囲の几帳が倒れる喧騒の中、驚きの余りにすぐには顔を隠せずにいるところで狭衣ははっきりと今姫君の顔を見ているのである。

さて、この二人の描写と二で取り上げた源氏の宮の描写を比較すると、源氏の宮の描写は、狭衣の視線をたどるように具体的に示されていることがわかる。その中でも、髪の間から見える身体に言及している点は非常に興味深い。髪が身体にかかっていることで長さや豊かさを想起させ、一方でその合間に見える「腰つき」や「腕」といった部位に視点を当てている。飛鳥井女君や今姫君への視線ではどこか具体的な部位は示されることなく、狭衣がいかに源氏の宮をじっくりと見つめていたのが分かるのである。

まとめにかえて

本稿では三条西家本を起点にして、登場人物の語り方の差異について考察してきた。本来であれば、諸本分類の状況やもっと詳細に写本ごとに本文を取り上げる必要があったと思われる。しかしながら、天稚御子と源氏の宮という物語にとつて重用な登場人物の語り方は多様であることが、本稿での取り上げ方でさえも浮かび上がって来たのではないだろうか。今後、より多くの諸本における多様な表現とそれを支えるものが何であるのか、考察を深めていきたい。

最後に今後の見通しを述べ、まとめにかえたい。本稿の一、二で取り上げた本文では三条西家本と蓮空本の本文一致が多い。蓮空本は蓮空と称した甘露寺親長（1425～1500）の自筆本で巻一に明応六年（1497）、巻二に明応七年の識語を持ち、現存は巻二までの写本である。三条西家本は三条西公条の書写によるものと考えられており、室町中期～後期の公家による『狭衣物語』の書写活動の一端がこの二本の写本から浮かび上がる。

蓮空本巻二の識語には「不審多如何々々」とあり、文意の通らないところに不審を抱きながらも書写していた様子が見受けられる。『親長卿記』によれば、明応七年六月二十六日条に書写した『狭衣物語』は曇華院（京都尼寺五山の一つ）に持参されている。尼寺からの依頼だったと想定できよう。一方の三条西家本にはそうした情報はないが、小本であり表装されないまま近代まで残っていたもののようであり、他者のために書写したものとは考えにくい（一部の和歌に付箋が貼られていることから三条西家内部で利用されていたと考えられる）。室町時代の享受者たちにとつて『狭衣物語』の表現方法はどんな意味を持っていたのか。例えば二で取り上げた『源氏物語』引用の削除の問題などは、『源氏物語』を書写し研究しつくしていた蓮空や公条の存在と関わるのではない。今後、これまで研究成果が蓄積されてきた縦の流れの享受研究を、一つの時代をもつて横から考えてみる、そういう方法があってもいいのではないだろうか。本稿はその試みへの一歩である。

注

(1) 三条西家本は、諸本分類上、次のようになる。

三谷榮一氏の分類：第三系統

中田剛直氏の分類：第一類第二種 D

長谷川佳男氏の分類：第一群

三谷氏は『狭衣物語の研究 伝本系統論編』（笠間書院、二〇〇〇年）所収の 七において、「意外にも巻一において第三系統に属する本文が非常に勢力のあることであって、いわゆる流布本は近世の版本の写しの類を除けば、案外に少く、中世に於いて巻一の中最も流布していたのは、第三系統ではなかったのかの想像を強くさせるのである。」（二七九頁）や「現存写本の多数、流布本の写し以外は、第三系統か、その系統に他系統の混入や補写により成立しているものであるのに驚嘆する。即ちそれら多くの書写年代たる室町から江戸初期にかけては第三系統が最も流行していたのであって、いわば中世時代における流布本はこの系統であつたと私は考えている。」（二八九頁）と指摘されている。前掲中田氏の分類は「狭衣物語卷一伝本考」（『国語と国文学』第三五巻五号、一九五八年五月）及び『校本狭衣物語 卷一』（桜楓社、一九七六年）により、長谷川氏の分類は「狭衣物語の本文批評 卷一、第一群と第三群の関係」（『国文学論集』二十一号、一九八八年一月）及び「狭衣物語の本文批評 卷一、第一群下位グループの内部構造」（『国文学論集』二十三号、一九九〇年一月）による。加えて、中城さと子氏は「京大近衛本巻

一について 流布本との関わりにもおよび」（『論叢狭衣物語 4 本文の様相』新典社、二〇〇三年）で、三条西家本と文禄本は近似すること、京大近衛本・四季本は三条西家本の転写の可能性があり、そこから宝玲本が派生した可能性を指摘されている。

(2) 三条西家本と近い本文を持つと考えられる写本（巻一のみ）は以下の通りである。

四季本：室町中期写

文禄本：承応三年（1654）写、文禄二年（1593年）識語

宝玲本：慶長（1596）元和頃（1596）以降写

京大近衛本：寛文（1661）以降写

淡川本（淡川家旧蔵、宮内庁書陵部蔵）

(3) 三条西家本の引用は、学習院大学平安文学研究会編『三条西家本狭衣物語注釈』（勉誠出版、二〇一九年）に拠る。

(4) 狭衣物語研究会編『狭衣物語全註釈』 卷一上（おうふう、一九九九年）。以下、『全註釈』とした場合、この本を指す。

(5) 前掲注（4）、『全註釈』における当該場面の【鑑賞・研究】欄で、三谷榮一氏は系統によって中心となる人物が変化していることを指摘している。その他、天稚御子の意義について論じる先行研究は多いが、本論では「天稚御子」がどのように紹介されていくのかについて、諸本間での違いをひとまず指摘しておきたい。

(6) 『源氏物語』の引用は新編日本古典文学全集（小学館）に

抛る。

(7) 中田剛直『校本狭衣物語 巻一』(校楓社、一九七六年)

(8) 『全註釈』における当該場面の【鑑賞・研究】欄で井上眞弓氏はこの場面について、次のように指摘されている。

源氏の宮は白い単衣を着用し、つやつやとした黒髪を長くなびかせて、赤い紙でしつらえた書物を一人で見ていたと描写される。外光は直接届きはしないものの明るい光の中で、それらの色彩は狭衣の中將の胸を高鳴らせるに足るあざやかなものであり、源氏の宮の美しさをきわだたせてもいたことであろう。絵画的といっても過言ではない設定である。

首肯される指摘である。三条西家本の場合、「赤」の発見が黒髪の間からということとなり、深川本等と比べ隠微な印象を受ける。

(9) 『源氏物語』引用のあり方については、後藤康文『狭衣物語論考 本文・和歌・物語史』(笠間書院、二〇一一年)第一部一、片岡利博『異文の愉悅 狭衣物語本文研究』(笠間書院、二〇一三年)第三章、第九章でも論じられており、後藤氏の指摘通りこの場面は後人による書き加えと考えられるが、削除の可能性も示しておく。この点については今後も考えていきたい。なお、源氏の宮の容姿については、三谷榮一氏が諸本を比較しながら論じられている(『狭衣物語の研究 異本文学論編』笠間書院、二〇〇二年。三)ほか、湯原美陽子『王朝物語文学における容姿美の研究』(有精堂、

一九八八年) 第二部第六章で詳しく検討されている。

(文学部准教授)